

※最新版は、

https://www.nise.go.jp/nc/report_material/research_results_publications/leaf_series
から直接ダウンロードできます。



特別支援教育リーフ Vol.8

聞こえにくさのある 子供の理解と支援



独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

[インターネットによる講義配信もあります。詳しくは「NISE 学びラボ」へ](#)



子供の聞こえの状態や思いを把握しましょう

指示通りに動けなかったり、ぼんやりしたりしている子供は、もしかしたら聞こえにくいことに原因があるかもしれません。聞こえにくさのある子供が、どのような聞こえ方をしているかを把握し、どのような場面で、どのような事に困っているかを知らうとすることが大切です。そのうえで、どのような配慮を行えば、聞こえにくさのある子供が授業や活動に主体的に参加しやすくなるかをまず考えていきましょう。

◆聞こえにくさのある子供への対応は、まず子供の聞こえの状態を丁寧に把握するところから始めましょう。

◆子供一人一人によって、聞こえの状態や対応方法が違うということを理解し、複数の工夫の組み合わせを考えましょう。

指示通りに動けない!?これってなぜ？

授業や活動の中で、話の内容を理解できていないように見えたり、指示通りに動けなかったりする子供はいませんか？また、周囲の様々な音や音声を気にせず、ぼんやりとしている子供はいませんか？

このような子供の中には、もしかしたら聞こえの状態に原因がある子供がいるかもしれません。軽度であっても難聴の場合は、校内放送が校舎内では聞こえるけれど、グラウンドでは何を言っているか聞き取れなかったり、教室内で友達の声聞き分けることなどに困難さを感じたりしています。また軽度の難聴の中には、日常生活でのコミュニケーションは支障がないので見落とされがちですが、「時々聞こえないふりをしている」と誤解される子供もいます。

聞こえにくさにもいろいろある

子供の聞こえにくさには、一人一人違いがあることを理解する必要があります。

両方の耳を掌で覆って音や音声を聞く状態が軽度の難聴です。他人には聞こえていても本人には聞こえない音や音声が多くあります。もう少し聞こえにくい難聴になると静かな話し声はもちろんのこと、日常の会話も聞き取ることが難しくなります。

左右の耳のうち片側だけが極端に聞こえにくい子供もいます。日常生活を送る上ではあまり支障がないと考えられていますが、聞き取りに自信が持てず、何度も聞き返したり、声がる方向が分からず戸惑ったりする子供もいます。

補聴器や人工内耳（※）を装用していても、すべての音や音声を聞こえる子供と同様に完全に聞き取れていないことも多いかもしれません。聞こえ方も子供によって、小さくなったり、歪んだりすることもあり、そのことが原因で、話を聞き漏らすこともあります。騒音下ではさらに聞こえにくくなることもあります。

私たちは、日常、様々な音や音声中に囲まれた生活をしています。聞こえにくさのある子供は、そのような音や音声の情報を捉えにくいと感じながら生活しています。子供によっては、生活全般にわたり、聞き取りには集中や緊張が常に伴い、かなり心労を感じていることにも気付いてあげましょう。

※人工内耳とは、現在世界で最も普及している人工臓器の一つで、聴覚障害があり補聴器での装用効果が不十分である方に対する唯一の聴覚獲得法です。（引用：日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会 HP）

子供の聞こえの状態を想像することを大切に

聞こえにくさのある子供が学校生活で感じている困難さは、聞こえる人からは分かりにくいことが多いといわれています。

例えば、体育の集団競技でプレー中に仲間から声をかけられたり、審判が笛を吹いたりしても気が付かず支障をきたすことがあります。このような経験をすることにより、参加を拒んだり、参加しても周りの様子を気にしながら不安感を持って参加していたりする場合もあります。(引用：聴覚障害教育これまでとこれから コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を中心に/脇中起余子)

子供と学校生活を共にする中から、子供の聞こえの状態や思いを把握しようと努めることが何より大切です。子供はことばでは表現しにくくても、その思いを表情やしぐさ、時には視線によって表します。それらを受け止めて、子供の状態を想像し、子供のおかれている状況や考えていることを知り、気持ちに寄り添う姿勢が大切です。

聞こえにくさがあるのでは?と思ったら

まず、耳鼻科への受診を勧めましょう。もしも、その子供が、聞こえのことで耳鼻科に行ったことがなければ、一度通院を勧めることは必要です。その上で、学校では次のような教育的対応が考えられます。また、子供が困っていることを誰かに話せる関係づくりも大切です。本人の考えを聞いて対応策と一緒に考えるよう努めることから始めましょう。

《教室環境》

ドアの開閉時や机・椅子の移動時に発生する不快な騒音を減らしましょう。補聴器や人工内耳を通して聞くと、聞こえにくい子供にとって、かなり大きく不快に感じることがあります。机や椅子の足元にテニスボールをはめ込んだり、教室の窓にカーテンを引いたりするだけでも音の反響が軽減し、聞き取りやすくなります。また、座席の位置は聞こえにくいから前の方にするのが考えられますが、子供によっては、クラスメートの様子が見てわかる方が安心して授業に臨める子供もいるため、まずは子供の意見を聞くことが大切です。

《授業での配慮》

教師は、黒板を向きながらではなく、話すときは口が子供に見えるようになるべく前を向いて話します。口形をはっきりさせ、口元をよく見せてゆっくり明瞭に話しましょう。

指示内容は複数ではなく一つに絞り、具体的な言葉ではっきりと訴えたり、一つが遂行できてから次の指示を出したりするなどの配慮があると良いと思います。また、だれが話しているかを明確にし、一人ずつ話すということが有効です。表情や口形が見えるように話すことや、グループでの話し合いの場面では挙手してから話すなどの学級でのルール作りなどを考えます。

音声のみの情報では消えてしまうため、絵や写真カードを使って視覚的に情報を補い、内容を助けることや、授業の要点などできるだけ板書するようにすると、聞き漏らしてしまったとしても、手がかりがあると内容が理解できることにつながります。



《コミュニケーションの取り方》

一般的には視覚を重視した方法を考えることが有効ではない子供もいます。聞こえにくいと一括りにするのはなく、目の前にいる子供にとって分かりやすいコミュニケーション方法を考えていくことが大切です。

☆さらなる理解のために☆

「聞く」と「聴く」こと

「聞く」と「聴く」では意味合いが少し異なります。子供が「聴く」ためには「理解しようと進んで耳を傾ける」ことが必要です。子供が「聴く」ことができる授業づくりをしましょう。

補聴援助システム等の活用

特別支援学校（聴覚障害）では、マイクロフォン付きの送信機から話し手の声を受信機に送信する装置として、デジタルワイヤレス補聴援助システム、赤外線補聴システム等が活用されています。難聴特別支援学級でも、デジタルワイヤレス補聴援助システムが活用されています。また、話し言葉を自動で文字に変換する、音声認識アプリの活用も考えられます。

聞こえにくさのある子供の状況は、複数の教師で見取りましょう

難聴の子供の聞こえ方は様々です。例えば「7（しち）」という音声の「し」の部分が高い音で聞き取れず、「1（いち）」と聞いてしまう子供もいます。その子供に関わる複数の教師が、その子供の聞こえ方について、見取ることが大切ですし、「7」のようなエピソードがあれば、関わる教師で共有することが必要です。教師は一人で悩まず、各学校に配置されている特別支援教育コーディネーターの活用も進め、教師間で情報を伝え合い、工夫を重ねていきましょう。特別支援学校のセンター的機能を積極的に活用することも考えていきましょう。（センター的機能については、特別支援教育リーフ Vol.6「活用してみよう、センター的機能」を参考にしてください）

<参考情報>

[○和歌山県立ろう学校 分かる喜び 学ぶ楽しさを 子供たちに](#)

きくことが苦手な子供への授業時の配慮事項例がまとめられています。



[○和歌山県立ろう学校 「一すべての子どもに豊かな教育を—『聞こえにくさ・見えにくさ』気づきから支援へ」](#)

聞こえにくさのある子供の聞こえの実態や気持ち、教室での配慮の例についてイラスト入りでわかりやすくまとめてあります。



[○独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 NISE 学びラボ「聴覚障害児の自己理解と教育」](#)

聴覚障害児に対する自立活動における「自己理解」と障害認識について講義を行っています。



 独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所
NISE National Institute of Special Needs Education

★NISEのホームページ

<https://www.nise.go.jp/nc/>



編集 情報・支援部

TEL 046-839-6803 (代表)

初版発行 令和5年11月